

松山信直先生を送る

岩 山 太次郎

教育・研究面で一つのテーマを深く掘りさげることが得意な人もあれば、いくつかのテーマをあわせて幅広く追究・展開することが得意な人もある。大学や学会の運営でも、立案・企画に長けた人もあれば、運用に長けた人もある。松山信直先生は、教育・研究面でも大学や学会の運営でも、それぞれの両面に才能、手腕を発揮された類い希れな人である。「口も八丁、手も八丁」という言葉があるが、松山先生は正にそういう人である。「まったくまめだよ松山さん」と、いろはかるたまがいのことを私はかつて非礼にも言ったことがあったが、松山先生は本当にまめで、どんなことでも上手く考え、筋道をたて、実行して、けろりとしている人である。

松山先生が1955年に英文学科の助手に就任された時、私は大学院の1年生で、それ以来、もう40年も、文字通り公私ともにお世話になりっぱなしである。松山先生のあの両面性の秘密はひよっとしたら、15歳で入られた海軍での経験からではないかとも思うが、どうもそれだけではないようである。人の何倍もの努力と、ことを遂行する、これまた人の何倍もの強靱な意志、そして決して弱音を吐かない前向きの人生観にあるのだ、と近頃思うようになった。

アメリカ文学の研究が、わが国で本当に研究と言えるようになったのは、英文学の研究に比べると、そう古くはない。英文学科でなら先達の上野直蔵先生、オニール研究の木村俊夫先生をはじめとする諸先生方の伝統を引き継いで長年にわたって英文学科のアメリカ文学を支えてこられたのが松山先生である。ご専門の研究の中心はメルヴィルとホーソンであり、特にホーソン

論を数多く公刊しておられる。それらのご研究はあの恐るべき読書量に裏打ちされたもので、年を経るごとに広い視野のもとで、問題点の切り込みは鋭く、深くなり、わが国のホーソン研究を云々しようとすれば、松山先生の業績（たとえば、ホーソン文学における孤独、自然、フェア・レディ、ピイクチュアレスクネスなど）に触れなければならない。また、ホーソンとポーとのかわりに関しては、1989年3月、1989年10月、1990年1月の3連続論文はわが国ではじめて研究のメスが入れられた分野のものである。ピューリタニズムやトランスセンデンタリズムという二つの思想なくしては、アメリカ文学は考えられないが、それらの思想と文学のかわりの研究ということになると、1987年2月の「ピューリタニズムとトランスセンデンタリズムの文学」ほど明快に論じられているものを私は他には知らない。

松山先生のアメリカ文学でのご関心は、メルヴィル、ホーソン、ポーだけではなく、論文としてまとめておられるだけでも、クーパー、アーヴィング、H. アダムズ、S. クレイン、ヘミングウェイ、フィッツェラルド、W. P. ウォーレン、ヴォネガット等々と、19世紀はじめから今日の文学にいたるまでのもので、枚挙にいとまがない。こういう深さと広がりをお持ちであったから、そして言うべきことは歯に衣をきせずいきちんと言う姿勢（そのよき表れが『アメリカ学会会報』No.105（1992年5月）と『アメリカ文学研究』第30号（1994年3月）の書評であると私は思う）があったからこそ、日本アメリカ文学会という学会でも、本部幹事、関西支部長、そして全国の会長として、多くの会員が一目おく存在であったのである。

英文学科にとっても、松山先生はなくてはならない存在であった。言うべきことは言い、言ったことは実行し、すでに実行したことを言われるから、誰れもが松山先生には一目おかないわけにはいかないのである。英文学科の行政面で、私にとっては今でももっとも印象深いことは、1969年の例の大学紛争の時、なんとかしなければ講義を再開できない時にまとめた「英文学科改革の姿勢」の原案は松山先生の力によるものであったことである。その夏、

教務主任を辞任させてもらった私は先輩の一人と当時英語科の所属であった松山先生の三人で原案の作成にあたった。松山先生以外にはあの「改革の姿勢」はまとめあげられる人はなかったと思っている。そして今も感謝している。

松山先生の英語科目主任としての1年半の仕事、また英語科目担当者として16年間の英語教育ではたされた役割も重要である。同志社大学の英語教育にオーディオ機器を導入された最初の一人であり、今日の英語CAIの基礎は松山先生が築かれたとすることができる。

同志社大学のアメリカ研究の分野でも松山先生のはたされた役割は大きい。1958年3月末に同志社大学アメリカ研究所が設置されて以来、委員として、また1980年4月から1983年3月までは所長として、数名の先生方と力をあわせて、アメリカ研究所を研究所らしいものに作りあげられた。京都大学との共催の京都アメリカ研究夏期セミナーの35年の歴史も松山先生を抜きにしては語り得ないと言っても過言ではない。セミナー発足の最初の年から深く関与しておられ、セミナーの歴史35年間のうちの20数年間は、アメリカ在住のアドヴァイザーとの協議、セミナーへの講師の招へい交渉、資金援助団体が変わるたびごとの新たな援助団体探し、はてはパーティの飲物獲得まで、ほとんど毎年のように労を惜しまれなかった。1976年4月から1981年3月まではディレクターとして、このセミナーを文字通り切り盛りされ、専門家会議という新機軸も作られた。アメリカ研究所もセミナーの方も、私は松山先生のあとをすぐ引きつぐことになったが、松山先生は改革すべきは改革し、すべてお膳立てをしておいて下さったので、その通りを踏襲すればよかった。同志社大学アメリカ研究所が、東の東京大学アメリカ研究資料センター、西の同志社大学アメリカ研究所としてならび称せられるようなアメリカ研究活動拠点として認められるようになった原動力は松山先生にあった。

最後に個人的なことも少し書かせてもらいたい。(この部分は「松山先生」でなく、普段通りに「松山さん」である。)松山さんがフルブライト奨学金

と同志社大学アメリカ研究所奨学金などを受けられて、第一回目の在外研究でブラウン大学へ留学されていた1959年から1960年にかけての時、アメリカの大学院で殺人的な猛特訓を受けておられた忙しい時期にもかかわらず、1960年から同じような奨学金を受けて留学する予定になった私に、松山さんは何度も懇切な手紙を下された。勉強のことは勿論、たとえば愛用のテキストは持って行っても役に立たない、教室で使うものと同じ版でなければ、頁の照合時間が無駄なだけである、読まされる量が量だから、10冊や20冊の本を持って行っても何の足しにもならない、日本のオーバーは寒さの程度が違うから役に立たないというようなことまでも手紙には書いてあった。松山さんは丁度、第二子、三子をもうけられる頃だったからか、夫婦生活に関することまで綿密に教えてもらった。いま思い起こしても、本当に微に入り細をうがったアドバイスだったと感激してしまう。持つべきは良き先輩である。

松山さんが1970年から1972年にかけてのオハイオ大学とブラウン大学へのACLSの奨学金で在外研究をされた時も、私も同じ奨学金でインディアナ大学へ行くことになっていたので、生活用品をダンボール箱3箱分譲ってもらった。譲ってもらったと言うと、私どもがひと角なにかしたように聞えるが、そうではない。松山さんがプロヴィデンスを引払われるのが6月末で、私たちのブルーミントン到着が9月始めなので、ふた月ほど間隔があくのであるが、荷物は私たちの到着に丁度あうよう着く手配をして発送して下さっていたのである。荷物の中には小型テレビまであった。そのテレビの特性（特性と言うと特殊な機能を備えたもののように聞えるが、長時間使用すると過熱しがちな特異性があったテレビ）の使用法を丁寧に書いたタグがコードにぶらさがっているのには驚いた。生活用品も1年間重宝した。ただひとつだけ使わずじまいのものがあつた。料理用ナイフ磨き器である。私たちは不器用でその上無精者ときているので、ナイフの切れ味が悪くなるのは感じながらも、一度も使わなかった無用の長物であつた。

ご定年を前にして、5年前の1990年の夏に松山先生は健康を害された。不

屈の精神とあの我慢強さで健康を回復されたことは大変嬉しいことであるが、この3月末で同志社大学を定年でご退職されたことは、英文学科にとってはまことに残念なことである。今、英文学科は改革をしようとしている時である。こういう時こそ、松山先生の卓見を必要とするのである。今後も名誉教授として英文学科を見守っていただきたい。この4月からは京都女子大学の教授であられるが、ご健康には十分留意され、ますますのご活躍を祈念する。